

# イベントの企画を通じた大学生の成長に関する検討 —子ども対象キャリア教育イベント企画学生の振り返りレポートに対する テキストマイニング分析を用いて—

有川 かおり

---

## Study on Growth of University Students through Event Planning — Use of text mining analysis in students' retrospective reports on planning child career education event —

ARIKAWA, Kaori

---

### 要旨

【目的】学生有志が中心となって企画・立案してきた、キャリア教育イベントを通じ、学生がどのような成長を遂げたか、定性的に明らかにする。【方法】イベント企画に関与した学生が実施後に記した、振り返りレポートのテキストマイニング（計量テキスト分析）を実施。どういった場面で成長したかの抽出を試みた。【結果】学生たちは、人との関わりの中で成長していることが示された。外部の人との関わりの中からは、メールの仕方、打ち合わせの手法、情報共有の重要性等のスキルを得ていた。一方「学生同士」の関わりからは、人が理解できるよう指示を出すこと、正確に説明をするために必要な能力等のスキルを得ていた。全体を通じ、俯瞰して物事を見るスキルも得ていた。【結論】イベントの企画は、卒業後も活用できるスキルを身に付ける場として機能している。

### キーワード

生涯教育, 学生の学びと成長, キャリア教育, テキストマイニング, サービス・ラーニング

### Abstract

[Goal] This study will qualitatively clarify the growth achieved by students through career education events, which have been planned and devised mainly by student volunteers. [Method] Text mining (weighted text analysis) was carried out on retrospective reports that were written by students involved in event planning. The situations in which growth occurred were extracted. [Results] Students showed growth in their relationships with other people. Through dealing with people on the outside, they learned about email, methods for conducting meetings, and the importance of sharing information. On the other hand, through student-to-student relationships they learned the skills needed to accurately explain tasks to others in an understandable manner. Overall, they learned the important skill of looking at the big picture. [Conclusion] Event planning serves an important function in the acquisition of skills that can be utilized even after graduation.

### Key words

lifelong education, student education and growth, career education, text mining, service learning

## 1 課題の設定

知識基盤社会、急速な社会の情報化・グローバル化、生涯学習社会など、社会の大きな変化を背景に、大学教育は今、劇的な改革が進められている。その特徴の1つに、教員が一方的に何かを教えるのではなく、学生が、何を学び成長を遂げるかといった「学生の学びと成長 (student learning and development)」に重点が置かれていることが挙げられる (溝上2012, 2014)。

こういった教育改革の背景には、1990年代以降、欧米をはじめとする諸外国で繰り返されてきた、「知識の獲得は勿論

のこと、得た知識を活用する能力の育成が重要である」という議論がある。前述の能力は、経済協力開発機構 (OECD) では「キー・コンピテンシー」(主要な資質・能力等)、北米では「21世紀スキル」、イギリスでは「キースキル」、オーストラリアでは「汎用的能力」と呼ばれている。各国では、これらを基盤とした教育政策が立案・実施され、今日に至っている。

また、日本においても、内閣府の「人間力」をはじめ、厚生労働省の「就職基礎能力」、経済産業省の「社会人基礎力」、文部科学省の「学士力」等が次々と打ち出され、知識を活用する能力の育成が目指されてきている。

以上の背景から、今大学教育は、これまでの知識の習得のみならず「ジェネリック・スキル (generic skills)」「コンピテンシー (competency)」「21世紀型能力」などと呼ばれる、知識を活用する能力の育成が求められているのである。

上記の能力の育成を目指した実践の1つに、各大学で実施されている、学生主体による講座やイベントの企画・立案等がある。これらの能力の育成は、全国各地の大学で「サービス・ラーニング」に位置づけられ、実施されているケースが多い。しかし、多様な試みがなされているにもかかわらず、彼らの成長を数値化し、評価しようとする研究や、大学時代に育成された能力を、卒業後に再び評価しようとする研究は少ない。実践の効果検証が不十分であることが課題となっている。

サービス・ラーニングは、「教育活動の一環として、一定の期間、地域のニーズ等を踏まえた社会奉仕活動を体験することによって、これまで知識として学んできたことを実際のサービス体験に活かし、また実際のサービス体験から自分の学問への取組や進路について新たな視野を得る教育プログラム」である。導入の成果として、「①専門教育を通して獲得した専門的な知識・技能を現実社会で実際に活用できる知識・技能の変化させること、②将来の職業について考える機会の付与、③自らの社会的役割を意識することによる、市民として必要な資質・能力の向上」などが挙げられる(中央教育審議会2012)。

サービス・ラーニングのルーツは、1950年代～60年代におきた、アメリカの市民権運動や学生運動に求めることができる。1990年代の「国家及びコミュニティ・サービス法 (National and Community Service Act) の制定や、「キャンパス・コンパクト (Campus Compact)」という連合体設立以来、アメリカの多くの学校でサービス・ラーニングが導入されてきた(山田2008、内海・中村2014)。日本においても、1999年に国際基督教大学が導入して以来、全国各地の大学で実施されている。

日本におけるサービス・ラーニングは、既に実施されていた大学独自の取り組みを、政府が大学教育改革の一環として、注目・支援してきたという経緯がある。中央教育審議会(2002)では、「18歳以降の個人が行う奉仕活動の奨励・支援」の例として、サービス・ラーニングが挙げられている。「単位は与えないが、サービス・ラーニングプログラムの一環として位置づけられるもの」として、「(1) 大学が公的に行う諸外国におけるワークキャンプ、(2) 学生のクラブ活動として行っているユネスコクラブのスタディツアー、ワークキャンプ、点訳サークルの活動等」とされている。しかし、この答申におけるサービス・ラーニングの定義は、ボランティア活動と酷似しており、両者の間に明確な違いを説明することは困難である。10年後に発表された、中央教育審議会(2012)では、「社会の仕組みが大きく変容し、これまでの価値観が根本的に見直されつつある」ことから、「このような時代に生き、社会に貢献していくため

には、想定外の事態に遭遇したときに、そこに存在する問題を発見し、それを解決させるための道筋を見定める能力が求められる」とされている。これらの能力を獲得するための手法として、アクティブラーニングが示され、その一例として「インターンシップやサービス・ラーニング、留学体験といった教室外学習プログラム等の提供が必要」とされている。また同様の答申の中で、地域社会・企業等と大学の連携という文脈で、「サービス・ラーニング、インターンシップ、社会体験活動や留学経験等は、学生の学習への動機付けを強め、成熟社会における社会的自立や職業生活に必要な能力の育成に大きな効果を持つ」と、サービス・ラーニングの必要性・教育効果が示されている。

## 2 研究の方法と手順、分析対象イベントの背景

### 2.1 研究方法と手順

第1に、日本におけるサービス・ラーニングをめぐる議論(特にイベント企画を通じた学生の成長と課題)について、先行研究を基にその実態を明らかにする。

第2に、子ども対象職業体験イベントに関与した学生が実施後に記した、振り返りレポートのテキストマイニング(計量テキスト分析)を実施する。

第3に、テキストマイニングの結果を基に、学生がイベントの企画を通じ、どのような成長を遂げたか考察を行う。

以上から得られた知見を基に、大学を卒業し社会に出てからも、活躍し続けることのできる人材の育成についての手ごかりを得たい。

### 2.2 分析対象イベントの背景 — イベント企画の概要 —

本稿で分析するイベントは、聖徳大学生涯学習研究所主催「ジュニア夢カレッジ—プロから学ぼう仕事体験—」(以下、ジュニア夢カレッジ)というキャリア教育イベントである。ジュニア夢カレッジは、大学生有志を中心とした産官学民のメンバーが連携し、企画・立案・実施してきた。実施年度は、2015年度から2017年度の計3回である。企画メンバーは、例年5月に初回の会合を実施し、12月の実施日まで、8か月かけて準備を進めている。参加対象者は、小学校4年生から中学校3年生で、メインコンセプトを「プロから本気で、仕事の楽しさと厳しさを学ぶ」としている。年度によって異なるが、概ね15種前後の職業体験を提供し、200名程度の参加があるイベントである。

ジュニア夢カレッジの特徴は、目的の1つに、参加者である小中学生のキャリア教育は勿論のこと、大学生が企画から参画し、社会人基礎力の向上をはかることを掲げている点である。具体的には、「メンバーの組織化と役割の決定」「スケジュール・進捗管理」「職業体験講師との打ち合わせ」「必要物品の手配」「チラシのデザイン」「広報戦略の立案と具体的活動」等を大学生有志が中核となり、行っている<sup>1</sup>。また、関与する大学生は

授業の一環で集まるのではなく、有志のボランティアとして集まっていることも特徴の1つといえよう。

本研究では、学生が振り返りレポートを記入した「ジュニア夢カレッジ2」「ジュニア夢カレッジ3」を分析対象とする。

### 3 サービス・ラーニングに関する先行研究

筆者はこれまで、大学生と共に、子ども対象職業体験イベントの企画・立案を行ってきた。そして、共に活動した学生たちと考案した「イベントを成功させるために必要な能力に関する調査票（5件法）」を用い、学生の成長を定量的に評価する研究を実施してきた（有川・長江2017、有川・池田・長江2018）。調査の結果、企画・立案のプロセスを経て、「チャレンジする力」「ストレスコントロール能力」が伸びたことが明らかになった。一方で、「自分の意見を簡潔に説明する力」は落ちていた。卒業後は、「積極的に挑戦する力」や「相手に配慮する力」といった基礎的能力は維持される傾向にあったが、「人に相談する力」や「人に頼る力」といった課題解決能力、自己発信能力は低下している傾向があった。

以上のように、筆者はこれまで5件法による調査を用い、学生たちの成長を評価してきた。しかしこれらの研究は、定量的な評価にとどまり、学生たちが書いた文字データを定性的に評価するまでには至らなかった。当然のことながら、定量的な評価における課題の1つは、数値化できる内容のみしか分析ができないという点である。したがって先行研究では、「どこで活動を知り、なぜ活動に関わろうと思ったか」「活動に参画することに、どのような期待があったか」「活動を続けていく上での困難、喜び」「活動を通じてどんな力がついたか」といった、数値化できない内容を明らかにすることはできていない。

そこで本稿では、子ども対象職業体験イベントに企画から参画した学生が実施後に記した、振り返りレポートの分析を実施する。以上を通じて、学生がイベントの企画を通じ、どのような成長を遂げたかを、定性的に明らかにしたい。

## 4 学生の振り返りシートに関する分析

### 4.1 本研究で用いる分析手法

本稿では、学生の振り返りシートの分析に際し、樋口（2015）を参考に、KH Coder(製品バージョン 2.0.0.0)<sup>ii</sup>をダウンロードし使用している。樋口（2015）によれば、コンピューターを用いたテキスト型データの計量分析は、(a)Dictionary-basedアプローチ、(b)Correlationalアプローチの2種類がある。(a)は「分析者が作成した基準（コーディングルール）にしたがって言葉や文書を分類するためにコンピューターを用いるアプローチ」である。一方 (b) は「同じ文書によく一緒にあらわれる言葉のグループや、あるいは、共通する言葉を多く含む文書のグループを、多変量解析によって自動的に発見・分類する

ためにコンピューターを用いるアプローチ」である。本稿では、(b)Correlationalアプローチを採用し、分析を行った。

本研究において、KH Coder(製品バージョン 2.0.0.0)を活用し、テキストマイニング分析を行った理由は、以下の2点である。1点目は、大量の文字データの分類・分析があまり時間をかけずに行えるという点である。2点目は、手作業に比べ、作業者の主観に左右されずに分析を行うことができるという点である。これらの理由から、KH Coder(製品バージョン 2.0.0.0)を活用し、テキストマイニング分析を実施した。

### 4.2 データの処理

イベントを8か月かけて企画し、実際に当日の運営を経験した上で、学生反省会を実施した。実施日は、ジュニア夢カレッジ2が2017年1月19日、ジュニア夢カレッジ3が2018年2月1日であった。筆者は、学生反省会の中で、振り返りレポートの記入・提出を学生に指示した。回収できたレポート数は、ジュニア夢カレッジ2が18本（参画学生39名、回収率46%）、ジュニア夢カレッジ3が18本（参画学生24名、回収率75%）の合計36本であった。振り返りレポートは、項目を設定せず自由記述としたが、以下の4点を盛り込むことを条件とした。

1. 活動をどこで知り、なぜ関わろうと思ったか。
2. 活動に参画することに、どのような期待があったか。
3. 活動を続けていくうえでの困難、喜び。
4. 活動を通じてどんな力がついたか。

本稿では、学生が提出した振り返りレポートから、自動的に語を取り出し、頻出語リストや共起ネットワーク、対応分析を作成した。分析のキーワードは、KWICコンコーダンスコマンド<sup>iii</sup>を活用し、当該語の文脈を探ることとした。このことにより、学生がイベントの企画を通じ、何に悩み、どんな成長を遂げたかを探っている。

尚、本研究は倫理的配慮から、学生には事前に書面にて研究の趣旨、結果の公表を行うことを説明した。さらに①個人名等は記号に置き換えて処理し、記入者が特定されないように厳守すること、②得られた情報は研究者が責任を持って管理することを説明し、同意を得たうえで実施している。

### 4.3 全振り返りシートのテキストマイニング

自由記述の全レポートから得られたデータをKH Coderを用いて前処理を実行し、文章の単純集計を行ったところ、396の段落、422の文を確認することができた。分析対象ファイルに含まれる全ての語の延べ数（総抽出語数）は7,920、何種類の語が含まれているかを示す数（異なり語数）は936であった。そのうち、助詞・助動詞など、どの文章にも登場する語を除外した結果、分析に使用される語は2,975（異なり語数733）であった。

表1：全レポートの頻出語リストと出現頻度（上位100語）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
する	208	力	14	いる	8
思う	116	ありがとう	13	とても	8
参加	74	関わり	13	メール	8
ない	68	昨年	13	メンバー	8
ある	50	紹介	13	関係	8
なる	48	先生	13	今年	8
子ども	46	大切	13	就職	8
人	46	ジュニカレ	12	場面	8
できる	41	活かす	12	職業	8
楽しい	38	今回	12	色々	8
自分	35	仕事	12	成長	8
関わる	32	少し	12	普段	8
学ぶ	28	よい	12	イベント	7
企画	28	無い	11	学部	7
出来る	28	期待	11	楽しむ	7
活動	27	多く	11	計画	7
嬉しい	25	打ち合わせ	11	見る	7
学生	22	分かる	11	交流	7
知る	22	活	10	今	7
良い	22	協力	10	仕方	7
大人	21	興味	10	時間	7
つく	20	好き	10	就	7
コミュニケーション	19	持つ	10	生涯	7
感じる	19	授業	10	同士	7
考える	19	出る	10	付く	7
やる	18	接す	10	様々	7
経験	18	他	10	将来	6
当日	17	多い	10	伝える	6
去年	16	能力	10	聞く	6
社会	16	意見	9	役立つ	6
身	16	言う	9	地域	6
先輩	16	小学生	9	講師	6
ボランティア	15	難しい	9		
リーダー	14	話す	9		

注：ジュニア夢カレッジ2、ジュニア夢カレッジ3に企画から参画した学生が書いたレポートを、KH Coderを用いて単純集計を実施した。

これらの語のうち、頻出語上位100語までのリストと出現頻度をまとめたのが表1である。

繰り返しになるが、ジュニア夢カレッジは、参加者である小中学生のキャリア教育は勿論のこと、大学生が企画から参画し、社会人基礎力の向上をはかることを目的の1つとしている。また、特徴の1つに、関与する大学生は授業の一環で集まるのではなく、有志のボランティアとして集まっていることも挙げられる。したがって、イベントの特性上「参加」「関わる」「学ぶ」「企画」「活動」といった語が多く使われていた。また、イベント企画では、自発的に物事を考え、人とコミュニケーションを取りながら、考えて企画を進行しなければならない。そのため、「考える」「コミュニケーション」という語も多く使用されていた。「思う」という語の使用頻度が高いのは、活動を振り返り自分の意見を述べるレポートという性質上、当該語が文末に多用されたためである。以下、KWICコンコーダンスを活用し、学生たちのレポートから、参加者である「子ども」、企画立案の当事者（学生）である「自分」というキーワードに関わるいくつかの文を抜粋する。（下線部は筆者が加筆した）

#### <子どもに関する語>

- ▶自分達で企画して、子ども達にその企画を楽しんでもらいたいという想いから、参加しました。
- ▶1限から準備に取り掛かったこと、多くの子どもが笑顔で興味津々になって取り組んでいる姿を見られたことは良い思い出です。
- ▶子どもがどのような反応を示すか、見てみたいと思いました。
- ▶保育者を目指しているので、子どもと関われることを期待しました。
- ▶将来教員になった時に関わる子どもと関わり、経験を少し積むことができました。
- ▶子どもの、興味のあるものに対しての意欲を知るチャンスだと思いました。

#### <自分に関する語>

- ▶去年のジュニカレ2で自分に力がない事が分かり、行動力や自己管理能力を身につけ、社会に出て恥ずかしくない人間になりたいと思って再チャレンジしました。
- ▶今まであまり自分から意見を言ったりしたことがなく、このボランティアを通して何か変わったらと思いました。
- ▶子ども達の将来へのビジョンを広げられる事、地域や様々な人と関われる事、また自分も職業の担当について学ぶことが出来る事等、多くの学びがありました。
- ▶自分も職業体験の様なものを前にやったことがあって楽しかったので、今度は自分が企画やサポートする立場になって成長したいと思いました。

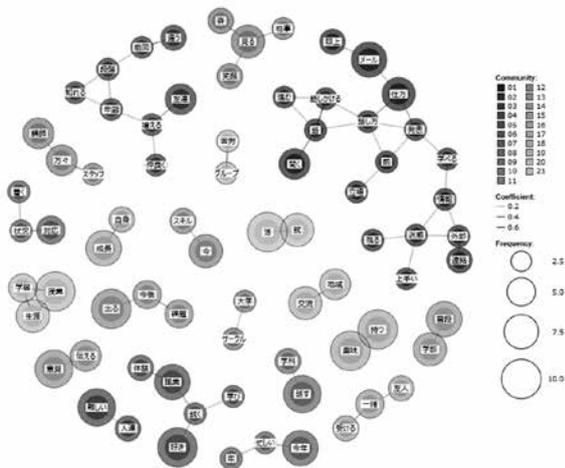
以上から、「子ども」に関しては、「楽しんでもらいたい」「喜んでもらいたい」という学生の純粋な想いと、「大学で学んでいることを実践してみたい」「子どもと関わって経験を積みたい」という、自身の学びを深めたいという両面が読み取れる。一方、企画立案の当事者（学生）である「自分」に関しては、自らのスキルやコンピテンシーを内省しながら、自己変革を目指しチャレンジする姿勢を読み取ることができた。

#### 4.4 共起ネットワーク図から見る学生の悩み・喜びと獲得した能力・スキル

次に、学生が書いたレポートを、KH Coderの共起ネットワークコマンドを用い、出現パターンが似通った語を結んだ図（図1、図2）を作成した。尚、出現数による語の取捨選択最少出現数を10に設定したものが図1、最小出現数を5に設定したものが図2である。描画する共起関係の絞り込みは、描画数60に設定した。線の太さは共起関係の強さを示している。出現回数が多いほど、大きな円で描かれるように設定し、円の色の濃淡

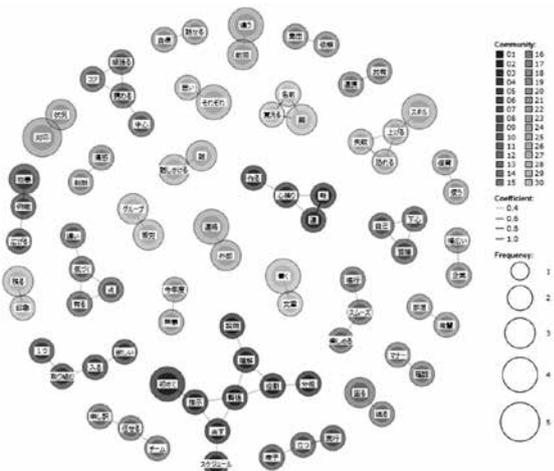
は媒介中心性<sup>iv</sup>によって、色が濃い言葉ほど中心性が高くなっていることを示している。

図1：共起ネットワーク（10語）



注：ジュニア夢カレッジ2、ジュニア夢カレッジ3に企画から参画した学生が書いたレポートを、KH Coderを用いて共起ネットワークを作成した。

図2：共起ネットワーク（5語）



注：ジュニア夢カレッジ2、ジュニア夢カレッジ3に企画から参画した学生が書いたレポートを、KH Coderを用いて共起ネットワークを作成した。

図1、図2どちらにも共通していることは、「外部の人との関わり」や「学生同士の人間関係」に関する語のクラスターが多いという点である。図1では右上と左下に、図2では左上に、人との関わりに関するクラスターが布置されている。ここから、「目上の人へのメールの仕方や話し方」「話し方や聞き方」を意識しながら、「外部の人への連絡」をとっていたことを読み取ることができる。また、「緊張しながら、初めて指示を出す」「理解してもらえよう説明する」「役割分担をする」等、学生同士の人間関係においても、双方にコミュニケーションをとりながらイベント企画を進めていたと、解釈することができる。

以上のように、イベントに関する考察や認知において、「外部の人との関わり」や「学生同士の人間関係」が相当な割合を

占めていたことを、この共起ネットワークが示している。以下、KWICコンコーダンスを活用し、学生たちのレポートから、「外部の人との関わり」や「学生同士の人間関係」のキーワードに関わるいくつかの文を抜粋する。（下線部は筆者が加筆した）

#### <外部の人との関わりに関する語>

- ▶状況対応力、コミュニケーション力や、目上の人への対応力がつきました。
- ▶目上の方とのメールの仕方や接し方（打ち合わせ等）を知りました。
- ▶外部の人と、内部の人で細かな情報の連絡が、行き届いておらず、双方に迷惑をかけてしまったことがありました。
- ▶様々な人と情報共有、協力、連携する事が大切だという事を学びました。

#### <学生同士の人間関係に関する語>

- ▶コミュニケーション能力がつきました。初めて人にちゃんと指示を出しました。緊張しましたが、きちんと動いてくれて嬉しかったです。
- ▶グループ内のリーダーというのが初めてだったので、人に指示をすることに慣れておらず、苦勞しました。
- ▶相手と何かを進めていくには、相手が理解できるように考え、説明する事が必要だと感じました。また当然ですが、説明するためには、自分自身がしっかりと理解しなければならないということも、改めて学びました。
- ▶部活動とは違う緊張感を持って、自分の役割を理解して行動することができました。

その他特筆すべき点は、「物事を俯瞰して見る」という語が、共起ネットワークの中に布置されたことである。人工知能（AI）などの技術革新が急速に進展する時代において、「俯瞰して見る」ことは、人間ならではの能力として育成が急がれる能力の1つであると考えられる。このことから、「俯瞰して見る」ことの重要性は、中央教育審議会大学分科会将来構想部会でも、繰り返し議論に挙がっている。今後の高等教育改革関連の答申に明記されることも予想されている内容である。

以下同様に、KWICコンコーダンスを活用し、学生たちのレポートから、「俯瞰」というキーワードに関わる文を抜粋する。（下線部は筆者が加筆した）

#### <俯瞰に関する語>

- ▶視野を広げ、物事を俯瞰的に見ることの重要性を学んだ。
- ▶俯瞰的に物事を見ようとする力を少し得た気がします。
- ▶与えられた役割をこなすだけでなく、俯瞰して物事を見ることの大切さを学びました。



よう。

研究課題としては、以下の2点が挙げられる。1点目は、担った役割別の分析を実施するまでには至らなかった点が挙げられる。企画全体のコーディネートを行っていた「リーダークラスの学生」と、広報や職業担当講師との打ち合わせ等を担った「それ以外の学生」を分けて実施すれば、違う結果が出る可能性もある。したがって今後、リーダークラスの学生と、それ以外の学生を分け、詳細な分析を実施していきたい。2点目は、ヒアリング調査のような、口頭・面談をしての調査ではないため、レポート記述についての学生の意図を、深く探求できなかった点が挙げられる。学生に対し、詳細なヒアリングを実施することができれば、さらに深い考察をすることが可能であったと考える。今後、詳細なヒアリング調査を実施し、考察を深めていきたい。

以上2点を通し、「イベントの企画を通じた大学生の成長」について、さらに研究を発展させていきたい。

#### 参考文献

- ・中央教育審議会（2002）「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1287510.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1287510.htm)（2018年8月10日最終アクセス）
- ・山田明（2008）『サービス・ラーニング研究—高校生の自己形成に資する教育プログラムの導入と基盤整備—』学術出版会
- ・溝上慎一（2012）『生成する大学教育学』京都大学高等教育研究開発推進センター（編）、ナカニシヤ出版、pp.119-145
- ・中央教育審議会（2012）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）用語集」[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf)（2018年8月10日最終アクセス）
- ・溝上慎一（2014）『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの変換』東信堂
- ・内海成治、中村安秀（2014）『新ボランティア学—支援する／されるフィールドで何を学ぶか』昭和堂
- ・樋口耕一（2015）『社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版
- ・有川かおり、長江曜子（2017）「地域との連携を通じたキャリア教育の効果に関する検討—大学生が企画・立案した“子ども対象キャリア教育イベント”に関する考察—」聖徳大学生涯学習研究所紀要15号、pp.55-64
- ・有川かおり、池田美咲、長江曜子（2018）「地域との連携を通じたキャリア教育の効果に関する検討—大学在学中に“子ども対象キャリア教育イベント”を企画した卒業生の追跡調査—」聖徳大学生涯学習研究所紀要16号、pp.61-72

#### 謝辞

本稿では、2016年、2017年に聖徳大学生涯学習研究所で実施した「ジュニア夢カレッジ2」「ジュニア夢カレッジ3」に企画から参画した学生を対象に、調査を実施した。快く調査に協力してくれた学生たちに、あらためて感謝したい。当然のことながら、本稿に存在し得る過誤等の一切の責任は筆者に帰属することを付記しておく。

- 
- i ジュニア夢カレッジの詳細については、有川・長江（2017）を参考にされたい。
  - ii KH Coderは、下記からダウンロードできる。（<http://khc.sourceforge.net/>）
  - iii KWICコンコーダンスとは、分析対象ファイル内でその抽出語がどのような文脈で用いられているか、検索できる機能である。（樋口2015、P143参照）
  - iv 各語がネットワーク構造内で、どの程度中心的な役割を果たしているかを示すもの。簡潔に示すと、その語がどれほど「ハブ」としての機能を果たしているかを定量的に評価するものである。